

多文化共生を目指すべき日本社会に寄与し得る 接触場面研究の可能性

尹 智 鉉[†]・春 口 淳 一^{††}

“Contact Situations” and Their Contribution to a Shift towards
Multicultural Symbiosis in Japanese Society: A Discussion Focusing on
Possible Areas of Research

YOON Jihyun, HARUGUCHI Junichi

Abstract

As the multicultural reality in Japanese society becomes increasingly evident, future research on “contact situations” involving Japanese must move past the present preoccupation with defining the characteristics of native and non-native speakers. In short, we argue that the time has come for research to inquire from the perspective of building a multicultural symbiotic society in Japan. In this study, we carry out a meta-analysis of the research on contact situations published in the past five years and evaluate the potential for research on contact situations to contribute to Japanese society’s rapid shift toward multicultural symbiosis. By exploring the changes in, and future outlook of, research on contact situations, we consider how the results of such research can be leveraged to benefit society while also offering concrete proposals for ways research on contact situations can contribute to society.

[†] 早稲田大学 日本語教育研究センター 准教授 (任期付)

^{††} 大阪産業大学 国際学部国際学科 准教授

草稿提出日 6月26日

最終原稿提出日 7月25日

Keywords : 接触場面 (contact situation), メタ分析 (meta-analysis),
多文化共生 (multicultural symbiosis)

1. はじめに

現在, 日本における在留外国人の総数が247万人 (法務省統計, 2017年6月現在)¹⁾を超え, 年間の訪日外国人の数も延べ2,869万人 (2017年度)²⁾に達している。このような現状に関連して興味深いのが, 2018年2月2日発行の『週刊東洋経済』である。「隠れ移民大国ニッポン」と題して特集を組んでいるのだが, この表題からはいかに日本社会において外国人の存在が生活者として身近なものとなったか, またそれにもかかわらず行政はその存在を否定し, 必要な手を差し伸べることなく過ごしてきたことが窺われよう。いや, 実は行政ばかりではなく日本人一般としても自覚していないのが現状なのかもしれない。同特集の中に散りばめられた「いつの間にか隣人は外国人」, 「知ってます? あなたの街の外国人」といった小見出しが日本の現状を如実に語っている。

そして日本社会における外国人の存在感が強まる中で, 日本での「接触場面 (contact situation)」も, その頻度や参加者のバリエーションが豊かさを増している。そもそも接触場面とは, 同一文化内の相互行為場面である「内的」あるいは「母語」場面とは異なり, 他の言語や文化のメンバーとのコミュニケーション場면을指すものである (ネウストプニー 1987)。日本社会における接触場面の量的・質的变化は日本社会がますます多文化の様相を呈してきていることを意味する。

一方, 学術分野においても, Neustupný (1985) が「接触場面」を提唱してから30年, 以来, 日本国内外において様々な観点や角度から日本語接触場面を対象とした研究が行われ, 日本語の母語話者 (NS : Native Speaker) および非母語話者 (NNS : Non-Native Speaker) の言語行動を考える上で新たな視点と可能性を提示してきた。例えば, ファン (1998) が接触場面を参加者の属性に基づいて, 相手言語接触場面, 第三者言語接触場面, 共通言語接触場面³⁾に細分化させ, その多様性に言及してより20年近くが経過した。さらに村岡

1) 法務省ホームページ「在留外国人統計 (旧登録外国人統計) 統計表」(2018年5月7日閲覧)

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

2) 官公庁ホームページ「訪日外国人消費動向調査」(2018年5月7日閲覧)

<http://www.mlit.go.jp/common/001226297.pdf>

3) ファン (1998) によると, 「相手言語接触場面」とは, 非母語話者として相手の母語で話す場面であり, 「第三者言語接触場面」とは, 互いの母語以外で共通に使用できる言語を使う場面, 「共通言語接触場面」とは, 互いに相手の母語を聞いて理解はできても話せない場合などに, 互いに自分の母語を話すような場面である。

(2006)は、接触場面研究について、「場面として文化内と文化間の二項対立とその融合、参加者間の相互行為プロセス、言語以外の要素(社会)などを重視し、プロセスとバリエーションに関心を払う社会言語学として理解する必要がある」(p.105)と指摘している。

先述した日本社会の現状を鑑みたとき、日本語の接触場面研究は時代のニーズをどう捉え、それに応えてきたのだろうか。また、これまでの日本社会と、これからの日本社会にどのようなことを発信していくべきだろうか。日本の各地域やコミュニティレベルで多文化共生主義を具現化していくことが強く求められている現状を思えば、接触場面研究の重要性は色褪せることなく、むしろ一層高まったと言える。本稿では、2012-2016年に刊行された接触場面の研究論文⁴⁾に対するメタ分析を実施し、日本の多文化共生社会の構築に寄与し得る接触場面研究とは何かについて考察を行う。接触場面研究の変遷と展望を探ることで、社会に役立つ言語・コミュニケーションの研究成果の活かし方を考察し、社会への還元について提案を行うことを本研究の目的とする。

2. 調査

2.1 調査目的と調査方法

先述したように、村岡(2006)は、接触場面研究を社会言語学として理解する必要があると指摘している。これを受けて本稿も、接触場面研究の変遷と展望を整理することで、この研究領域を改めて社会と関連付けて捉える。また、それと共に、一連の研究成果をいかに社会へ還元していくか、具体的に検討することを目的とする。

調査では、Cinii (<http://ci.nii.ac.jp/>)で「接触場面」をキーワードに検索を行い、上記の通り直近5年間の論文をリストアップした。Ciniiは、国立情報科学研究所が提供する学術論文のデータベースであり、誰でも利用できる利便性と広く学協会刊行物や大学研究紀要を扱う汎用性の高さに特徴がある。接触場面研究の全てを網羅するとは言わないまでも、一定の傾向を見定める上で有益であろう。

さて、リストアップした論文の中から、Ciniiまたはリンク先から本文を入手できるものを中心に、一部はデータを取り寄せる形で文献収集を行った。その結果集められた計66本の論文を分析の対象とした。これらの論文に対する文献調査を通して、日本における接触場面研究の成果は社会に向けて何を発信し、どう活かされてきたか、その貢献と展望に目を向ける。

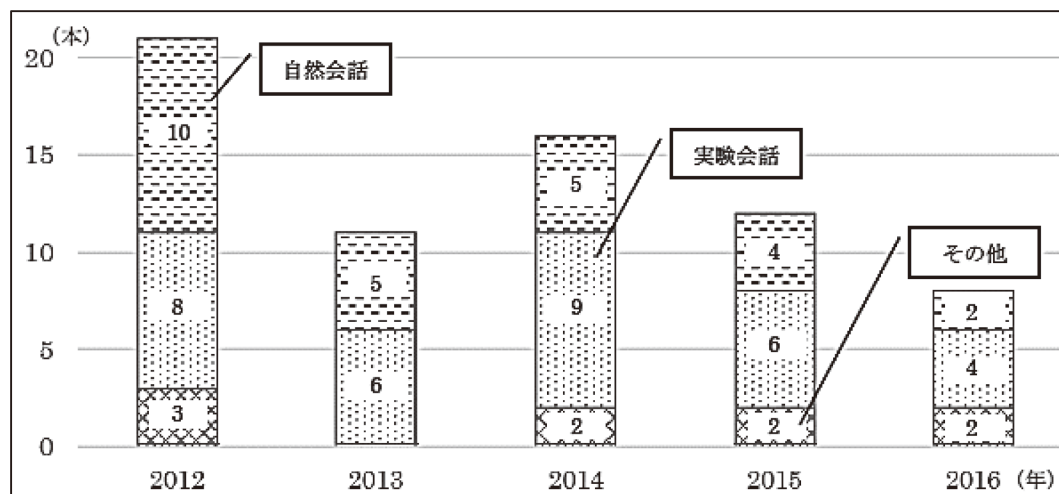
4) 本稿は2017年より論文の収集・分析に着手したが、その時点で、年単位で収集することのできる2016年からさかのぼって5年間を調査の対象に定めたものである。

2.2 調査対象

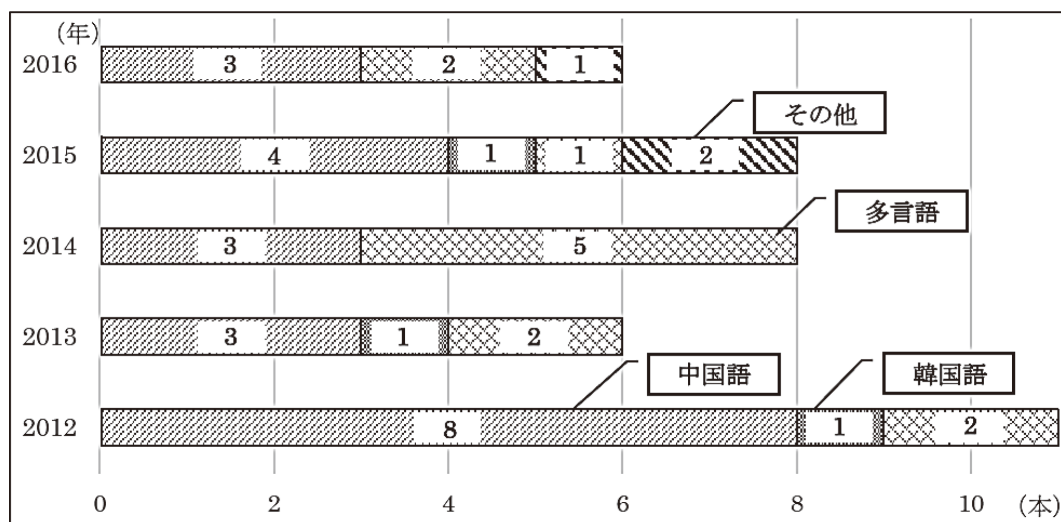
上記の通り、66本の接触場面研究を本稿では調査の対象とする。その詳細は、本稿末尾に挙げた巻末資料を参照いただきたい。本節では、特に個々の研究が対象とした参加者の特性等を整理しておく。66本の内訳だが、まず発行年で区分すると、2012年21本、2013年11本、2014年16本、2015年12本、2016年8本となる。このうち、直接会話データを収集して分析したものは42本であり、さらに実験的に会話場면을収集したものと自然な会話場面にこだわったものとに二分すれば、前者は33本、後者は26本であった。また、会話データに依拠せず、被験者の体験をアンケートから抽出した論文や、接触場면을題材とした教材開発の論文などが含まれる（【図1】を参照）。

次に、接触場面への参加者に関して、会話を構成する参加者数にも注目したい。二者間会話（例えば、NSとNNSの1対1の接触場面）と三者あるいはそれ以上による多者間会話とに分けたとき、後者については2012年、13年、15年にそれぞれ1例を数えるにとどまる。二者間会話が5年間で38例挙げられるのとは対照的である。

日本語接触場面においてNNSの母語への注目に特徴がないか、確認しておこう。特定の母語話者に特化した研究としては中国語が多くを占める他は、韓国語が若干あるばかりであった。多言語、すなわちNNSの母語にこだわらない研究も、その内訳に中国語、韓国語が含まれることは多く、両言語を母語とする者が日本語接触場面においては強い存在感を持っていることが窺える（【図2】を参照）。



【図1】 接触場面研究のデータの種別別論文数



【図2】接触場面研究のNNSの母語別論文数

3. 分析結果

2012年から2016年まで刊行された接触場面研究が、社会に向けて何を発信してきたのか、そして社会においてどのような活かされ方を示してきたのかについて分類・分析した結果を述べる。66本の分析対象論文をその特徴から、NNSをどう扱うのかに注目した「NNSの特徴に注目した論考」、NSの立ち位置について論究した「支援者としてのNSに注目した論考」、日本語教育の実践と結び付けた「教育現場での接触場面の活用を目指した論考」、そして従来の研究を踏まえた上で「接触場面研究の新たな視座を提案した論考」とに大まかに分けて記述することで整理する。なお個々の論文については、複数の分類項目にまたがって位置付けられるものもあるが、いずれかに分類することでその特性を際立たせるようにした。

3.1 NNSの特徴に注目した論考

本節は第3章の成果を、特にNNSの扱いに注目して詳述したものである。まず、2012年の計21本の論文の中で、篠崎（2012）と楊（2012）の論文は内的場面と接触場面での参加者の言語行動を比較している。とりわけ楊（2012）は、中国語と日本語の母語話者による内的場面と両者間の接触場面における初対面会話を分析し、共感構築的側面も重視される日本語母語場面の会話と、中国語母語場面の会話との違いを提示した上で、両者間の共感構築の可能性を論じている。この考察結果は、接触場面の研究成果から相互理解の促進の可能性を模索、提示しているという意味で、日本の多文化共生社会に寄与し得る接触場面

研究とは何かについて一定の示唆を与えている。

2012年にNNSの母語に特化したものとしては、中日接触場面におけるNNSの言語行動を取り上げた論文が7本あるが、これらは全て外国人研究者らによるものである(袁2012など)。一連の研究は中国人日本語話者が目標言語である日本語を駆使して接触場面に参加する際、その言語行動にはどのような特徴や傾向性が現れるのかを分析の対象としている。また、韓国人NNSを調査対象とした論文も2本あり、その中でも今(2012)は、韓国人の「接触場面に向かう言語管理」(村岡2010)に焦点を当て、韓国人居住者を対象とした言語バイオグラフィーからの記述を試みたものである。

前掲の村岡(2010:49)は接触場面のディスコースに現れる言語管理には当該場面に限られたミクロレベルの管理だけでなく、接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識の表れも観察可能であると指摘しており、前者を「接触場面における管理」(language management within situation)とし、後者は「接触場面に向かう管理」(language management towards contact situation)として区別している。今(2012)の後も、鄒(2013)や高(2014)の論文において「接触場面に向かう言語管理」が取り上げられている。

接触場面の参加者としてのNNSの言語行動に注目した研究(吉田2013など)は継続的に行われているが、以前の論考と比べて変わった点として、NNSが参加する接触場面がさらに多様化していることが挙げられる。例えば、吉田(2013)は対面での会話ではなくビデオカンファレンスを使った遠隔接触場面でのNNSのコミュニケーションにおける特徴を分析している。情報通信技術の発達に伴い、NNSが参加している接触場面が多様化しつつある現代社会の実相を反映している論考である。

「接触場面に向かう管理」(村岡2010)に注目した鄒(2013)は、日本に長期滞在している中国人居住者2名を対象に調査したライフストーリーの研究である。この論文では、NNSのライフストーリーを、日本社会において接触場面への参加経験を積み重ねてきた個々の自分史として捉えている。その語りの分析から、日本人の行動や規範まで習得したかどうかやNNSのネットワーク形成に強く関わっており、日本語習得にも影響を与えている点や、言語習得の意欲や目標の違いによって、言語的外来性を管理するかどうかが変わってくるという点を明らかにした。NNSの日本社会への適応問題を取り上げたことは評価に値するであろう。しかし、NNSが日本人や日本社会にどのように歩み寄ろうとしているのか、すなわちNNSの適応問題を、日本の社会文化的要素に対するNNSの評価という観点から論じているものの、NNSと共に接触場面を形成し、社会の成員として共に参加しているNSのNNSに対する歩み寄りという側面については全く触れられていない。

さて、2014年以降においても中国語母語話者と韓国語母語話者である日本語のNNSを

対象とした接触場面研究は行われている。例えば、王・瞿(2016)は、主に会話調査の方法で日中接触場面の自然データを収集し、中国人NNSの逸脱が起こった、または起こり得ると予測される会話例を中心に考察している。接触場面におけるNNSの言語行動に注目した研究の中で、韓国人NNSを対象とした林(2016)は、呼称使用の観点から接触場面における規範意識と言語行動を分析している。

その後、接触場面研究におけるNNSの母語背景はさらに多様化の傾向を見せている。勝田(2015)は、来日する留学生の多様化、特に東南アジアからの留学生増加の傾向を踏まえ、マレーシア人NNSと日本人NSの友人同士の会話から、日本語のあいづちの規範に対する評価、留意、調整について考察している。

また、アキバリ(2015)は、ペルシア語話者を対象として接触場面と内的場面の比較研究を行っている。日本滞在中のイラン人NNSと日本人のNSを対象に「Taarof(ターロフ)」⁵⁾場面における言語管理について考察している。ロールプレイの形式で、イランの独特の習慣とも言えるターロフ場면을対象に調査を実施し、イラン人母語話者が、異なる文化背景を有する日本人母語話者と形成するターロフ場面においてどのようなインターアクションが起きるのかを考察した探索的論考である。日本の社会において様々な母語背景や母文化の規範を有するNNSが、それらを日本語および日本の規範とどのように折衷させ、または使い分けをしているのかという点において、他の言語圏出身者へのさらなる展開も考えられる研究成果であろう。

一方、大津(2013)の研究は、接触場面に参加しているNNSに注目しているという意味ではこれまでの多くの接触場面研究と同様であるが、分析の対象としているのが、NNSのNSに対する評価であるという点で斬新な接触場面の捉え方だと言える。接触場面の参加者に対する評価に注目しているという意味では、高(2013)の論考にも注目すべきであろう。言語教育における評価研究の課題として、問題の所在を以下のように述べている。

近年日本の多文化共生の課題が指摘されるなか、外国人の日本語能力や言語問題に対する母語話者の「評価」が注目されている。言語教育研究では、「評価」に注目することによって、外国人の言語問題に対する母語話者の「評価」を事前に知ることができ、二次問題を事前に防げることができると考えている。また日本語の母語話者も

5) アキバリ(2015)では「ターロフ」の概念について、「日本社会において儀礼的な場面でのコミュニケーション・ストラテジーがあるように、イラン人社会においても儀礼的な場面、相手に対し敬意を示したい場面でのコミュニケーション・ストラテジーがある。この独特な言語行動・非言語行動をも含む社会的言語行動を「ターロフ」と呼ぶ」(p.15)と述べている。

自身の評価のあり方を振り返ることにより多文化共生社会づくりに積極的に働きかけることができるとしている。一方、接触場面研究では接触場面の参加者により否定的に評価された言語問題は、その評価される側の言語能力だけではなく、パーソナリティまで否定的に評価され、対人関係のトラブルにまで発展することもあると指摘している。

しかし、従来の評価研究は主に教授者や第三者の母語話者の視点から分析されたものが多く、接触場面の参加者の実際の言語使用場面を対象にし、当事者の視点から評価のことを考察した研究は少ない。(高2013:180)

多文化共生社会に移行しつつある日本社会の中で、評価する側と評価される側、そしてその根底にある規範の位置付けについて改めて問い直している。これからの日本社会の展望を語るために、これまで蓄積されてきた接触場面の研究成果を踏まえ、社会における研究成果の活かし方や、社会への還元の可能性を具体的に検討している論考である。

この論考以前に日本語の接触場面における「評価」の問題について詳しく述べた研究として村岡(2006)があり、接触場面の評価には各2種類の「肯定的評価」と「否定的評価」が存在すると述べている。まず「否定的評価」には、評価者自身が母文化規範に対して肯定的で、母文化と相違のある接触場面の要素を否定的に評価する場合と、逆に母文化規範に対して否定的で、それと類似している接触場面の要素を否定的に評価する場合がある。一方、「肯定的評価」とは、本人が自分の母文化規範に対して肯定的な場合、母文化規範と類似している接触場面の要素を肯定的に評価したり、逆に母文化規範に対して否定的な場合には、相違のある接触場面の要素を肯定的に評価したりすることを指す。

村岡(2006)が、本人の母文化規範に対する評価の相違が接触場面に対して肯定的評価をもたらした中国人第二言語話者の例を挙げているように、異文化接触の経験が肯定的評価に結び付くことは珍しいものではない。このような側面や可能性について社会とコミュニティの参加者がより自覚的になり、異文化に対する捉え方の見直しや歩み寄るための手掛かりとして接触場面研究の成果を活かしていけるという意味では「社会への還元」の一つの方向性を確認できる。

2014年も、千葉大学の研究プロジェクト報告書を中心に、接触場面における「評価」の問題を取り上げた論文が目立つ(高2014, フェアブラザー・相川2014, 宇佐美2014など)。フェアブラザー・相川(2014)は接触場面の言語管理プロセスにおいて評価の段階は、調整が行われるかどうかを決定する重要な役割を持ち、言語管理プロセスの中核をなすにもかかわらず、従来の研究ではあまり焦点が当てられてこなかったことについて次のように

指摘している。

評価段階の研究の重要性については、逸脱の評価によって接触場面全体の印象が変わるため、接触場面に快適に参加できるかどうかの鍵となることが考えられる。Gass & Varonis (1991), 熊井 (1992) などが指摘するように、否定的に評価された逸脱は、第二言語話者の言語能力よりも、第二言語話者の性格に関連付けられる傾向があり、例えば、留意された逸脱が、失礼、意地が悪い、攻撃的、常識がないと受け止められることがある。また、「評価における価値観の違いは、社会的相互行為におけるトラブルの原因」になるとも論じられている (宇佐美2012)。つまり、逸脱の評価が、人間関係の発展と接触場面への適応に大きな影響を与えるため、さらに研究を積み重ねる必要がある。(フェアブラザー・相川2014: 117)

NSとNNSによる社会的相互行為および評価の問題を多角的に検証していくことは、日本社会の時代的・社会的課題をどのように認識し、それらに対してどのように向き合っていくべきかという部分において解決の糸口を与えてくれるのではないだろうか。例えば、高 (2014) は韓国人移民の言語習慣に関する通時的管理 (今2011) というアプローチから、生活者としてNNSが持つ「接触場面に向かう管理」(村岡2010) に注目している。

一方、他者への「評価」ではなく参加者自らの「意識」を調査対象としているのが玉石他 (2016) と嶋原 (2016) の研究である。玉石らの研究では、NNSに対するインタビュー調査の結果から、同レベルの学習者との会話のほうがりラックスして、より自己表現しやすいという観点から第三者言語接触場面を会話教育の中で積極的に活かしていくことの必要性について論じている。また、学習者が「日本語能力」に関連して意識していたのは、習った文法項目などの言語形式の問題ではなく、コミュニケーションを円滑に進めるために互いに歩み寄る過程であったという。そして、このような接触場面参加者による歩み寄りの過程は、教室外でもNNS、NSを問わず会話する際に必要となるものであり、これを教室活動の中で経験することの有効性についても述べている。

嶋原 (2016) では、NSとNNSの双方に対して半構造化インタビューを行っている。接触場面における話題選択に注目し、これまでの接触場面参加経験を振り返ってもらい、「気楽に話せる時の相手やその時の話題」または「話していて居心地悪いと感じた時の話題」とはどのようなものだったのかについて意識調査を実施した内容を分析、考察している。

3.2 支援者としてのNSに注目した論考

近年の接触場面研究においてNSはどのように位置付けられているのか、本節では注目する。まず、日本語学習者(NNS)とその学習を支援する立場として日本人学生(NS)が参加する接触場면을対象とした研究として片山(2012)と脇坂(2012)がある。両方とも、支援者としてのNSを扱っている部分では同様であるが、NNSとの関わり方という点でNSの役割には違いが見られる。

片山(2012)は、自習室での「会話サポート」における接触場面の会話を分析した論考である。NNSとの接触場面に参加する経験を重ねることで、NSの言語行動および意識にも変化が見られたことを具体的な裏付けと共に示し、NSに対するサポートを続けることで、日本人学生にも学習者に対する様々な配慮が生まれていたと報告している。

脇坂(2012)の研究では、日本語学習者と英語学習者によるタンデム学習場면을対象としたケース・スタディを扱っている。互惠性の原則によって支えられたタンデム学習場面におけるNSとNNSの参加者の変容について次のように述べ、支援する側と支援される側の関係性に拠らない、双方向性に基づく両者間の関係性構築を明らかにしている。

互いを「対等な言語学習パートナー」であると認識し、「相手の学習をサポートする責任感」が高められていたことがわかった。さらにタンデム学習の互惠性の原則からもたらされた自身の学習への責任感に、相手の学習をサポートする責任感から生じた自分の学習への責任感が合わさることで、タンデム学習の学習計画を立てるとき、またタンデム学習活動中の主体的な発話と聞き返し行動において、学習者オートノミーが高められていたことが明らかになった。(脇坂2012: 75)

他にも野原(2014)では、NSとNNSが参加するロールプレイの実施後、NSに対してインタビュー調査を行い、MAXQDAを使ってその内容を定性的に分析している。分析の結果、NNSとのやりとりに対するNSの意識における中心的な概念として「円滑なやりとりの実現」が生成され、次のような4つのカテゴリと13の下位カテゴリが確認された。

- A) 相手の印象: ①交渉への態度, ②丁寧さ, ③適切さ, ④言語運用での積極性
- B) 自分の言語運用に対する意識: ⑤交渉ストラテジー, ⑥相手の日本語理解への配慮, ⑦今後のため, ⑧相互理解の姿勢
- C) ロールプレイに影響を与えた所与の要件: ⑨現実の社会, ⑩本当の自分, ⑪相手が外国人であること

- D) 現実の接触場面での相手への期待：⑫相互理解への努力，⑬日本人・日本社会の受け入れ

以上の分析結果から，NNSとのやりとりにおいてNSも自身の言語運用を意識し，調整しようとしていたことがわかる。つまり，相手のNNSに対する印象形成のプロセスには，NS自身の言語意識や言語運用の要素が組み込まれていると解釈できる。接触場面参加者としてNSが会話を支援する言語ホストの役割を自らに課し，そのような意識に基づく言語行動を行っていたのである。

一方，関崎 (2016) と許 (2016) は接触場面における「話題」に注目した研究である。前者は初対面における話題のスキーマを，後者はNNSが用いる話題転換のパターンを示している。これらの知見を接触場面参加者のNSが理解することで，NNSが抱く不安や負担の軽減に貢献できるであろう。NSの位置付けとしては，共にNNSへの支援者と目される研究と言える。

2016年に刊行された接触場面の研究論文は多くないが，その中でも浦野 (2016) は，接触場面におけるNSの役割および，NNSを支援するために必要なNS側の日本語運用能力について考察しているという点で注目に値するものであろう。浦野 (前掲) はその論考の冒頭において，「日本に在住する外国人の増加により，様々な場面で外国人と接触する可能性が高まっている。それは，普段から外国人との接触が多い人に限らず，どんな人にも起こりうることであるとも言える。一般の日本人が「接触場面」を経験する機会は増加している」(p.209) と述べた上で，接触場面において求められるNNS側の日本語運用能力とは何かという観点から，フォリナー・トーク (foreigner talk) やアコモデーション理論などの先行研究を概観している。実際の調査では，中国人NNSと日本人チューターのNSが参加する接触場面を録音・録画したデータを分析の対象とし，NSのNNSに対する支援行動として，NNSから発話を引き出そうとする行動を中心に考察している。ただ，この論考もまた，支援者としてのNSという位置付けからは逸脱せず，他の研究の延長線上にあると言える。

3.3 教育現場での接触場面の活用を目指した論考

接触場面を意識した教材作成や授業活動など，研究成果を日本語教育の現場で活用しようとする試みは，この5年に限ってもその例をいくつも挙げることができる。

まず，2012年には，接触場面で起こりうる出来事や接触場面の談話における特徴を授業のコースの改善や教材開発に取り入れた試みを論じた論文が複数確認できた (竹内2012,

粟飯原2012など)。これらの論考では、接触場面研究の成果を教育現場で活かす可能性が模索され、実践的な活用方法に関する具体的な提案および考察結果が示されている。

前年に続き、2013年には11本の論文のうち、3本がこれに該当した。内的場面における日本語の規範や日本人の規範だけを教育の指標としない教材の必要性を論じた実践研究や、日本語教師養成課程の教材に接触場面研究から得られた知見を取り入れた実践研究などが確認された。

授業活動としては、朴(2015)に注目したい。これはNNSの学習場面におけるピア・レスポンスに注目し、第三者言語接触場面となるNNS同士による場合とNSが参加する場合との比較を行っている。両者間の相違点を分析した結果から、NSが参加したグループでは日本語の表現を中心にNSから正確でわかりやすい説明を引き出せる長所がある一方、それがNSに対する過度の依存につながり、協働学習としての効果を減じる恐れもあると指摘した。また、「両グループとも、書き手・読み手という本来の役割から脱却し新たな役割としての支援を行うことで、ピア・レスポンス活動を豊かにすることが可能になる」(p.48)と述べている。これは、後述する市嶋(2014)が農業従事者と留学生の接触場面を考察した結果から「NSとNNSの境界を感じさせない相互の伝え合い」の可能性について論じた内容にも通ずるものである。接触場面参加者の役割を言語ゲストと言語ホストという二項対立の軸から考えることから脱却し、目的意識の共有と多様な価値の尊重によって、より豊かでダイナミックスに満ちた双方向性を構築していけることの可能性を示唆している。

3.4 接触場面研究の新たな視座を提案した論考

最後に、上記3つのカテゴリーとも一線を画す、新たな視座を接触場面研究にもたらしたと考えられる研究を取り上げたい。

接触場面研究の成果の活かし方として、教育現場での活用方法だけでなく、日本社会に向けた問題提起を行っている論考(清水2012, 大栗2012)も登場している点は注目に値する。清水(2012)は、新入生の初級レベルNNSが教室外でどのような接触場面に参加しているのかについて調査し、彼らが実際使用場面で参加できるネットワークが非常に限られていることや、時間が経過してもその多様性が欠けたままであることを指摘している。また大栗(2012)は、日本社会の中で中国帰国者のNNSが持つ多面性が、日本社会・日本人の規範とは異なっており、そのため彼らが日常生活の中で困難を覚えることをNNSのアイデンティティという観点から記述している。NNSが遭遇している接触場面での問題を通して、日本社会が抱える課題の一側面を切り取った研究であると言える。

実際の接触場面において「円滑なやりとりの実現」(野原2014)のためには障害の解消が必要なときもあり、山本(2014)はNSとNNS間の会話における「誤解」と「不信」の問題に対し、障害の解消を目指す相互行為として「(意味)交渉：negotiation (of meaning)」に注目して談話分析を行っている。母語話者と学習者が参加する接触場面での会話を例に、誤解および不信がどのような要因によって生じるのかについて分析し、その結果、NNS側の言語運用能力の不足に加えて、推論や参加者それぞれが持つ様々な知識によっても引き起こされていることが明らかになった。伝達上の障害解消を図る交渉の談話を俯瞰すると「NSによる確認要求→NSによる訂正や言い換え→話題の転換」という構造が見出されたとし、問題解消のための意味交渉の談話がNS主導で展開されていると述べている。その一方で、接触場面において「不信」の問題、すなわちNNSの発話内容の真偽が問題となっている場合は、競合する知識提示、否定的評価、ジョークや皮肉などの談話が確認され、より複雑な談話構成になると指摘している。

同様に、相互理解のための歩み寄りに基づく新たな社会的規範生成の可能性を論じた研究として宇佐美(2014)の論考を取り上げよう。NNSが書いた謝罪文に対するNSの評価という調査結果に基づき、NNSに対して大多数のNSが日本社会と日本語の内的規範の順守を求める傾向が強いという現状分析を行っている。また、接触場面ならではの「真の問題解決」や「人間関係維持」という価値に注目することで、内的規範の緩和による新たな規範の生成や双方向の歩み寄りが生まれ得るという可能性をも提示している。

さらに、現実の社会においては様々な価値観が存在し、価値観に優劣はつけられないため、どの場面においてどの価値観を採用すべきかを論じることは意味がないものとした上で、以下のような見解を示している。

われわれは日常生活の中で、「自分の価値観に基づく判断」を日常茶飯事として行っている。それがあまりに日常茶飯的であるために、多くの人は自らが、どのような価値観に基づき、どのようなプロセスで評価を行っているのか、ということを実感的に内省する機会を持っていない。また、自分の評価価値観・評価プロセスが他者のそれとどう違うのか、ということと比較する機会もない。

自らの評価価値観・評価プロセスを内省し、さらに他者の評価価値観・評価プロセスと比較対照する、ということは、よりよい社会的相互行為を実現していくためには極めて有効な手段であると言えるだろう。(宇佐美2014：91)

これは、自分の評価価値観・評価プロセスが他者のそれとどう違うのか、ということ

比較する経験に基づいて「多様性の中の普遍性」を導き出すことの可能性およびその重要性を論じたものである。確かに、現実社会の中で価値観の違いが社会的相互行為におけるトラブルの原因になることもある。しかし、評価価値観や評価プロセスは一見多様に見えるが、その多様性の中に何らかの「普遍性」を見出していくことは十分可能であるとしている。多文化共生社会を目指している昨今の日本の社会において示唆に富んだ見解であろう。

さらに、市嶋(2014)の研究成果は、地域社会・コミュニティにおける「多様性の中の普遍性」(宇佐美2014)を実証したものと見ることができる。これは農業従事者のNSと留学生のNNSによる農業体験活動を通して、そこでの接触場面における相互行為を調整行動という視点から分析した論考である。分析結果に基づき、NSとNNSとの対等かつ互恵的な関係づくりに資する言語活動空間はいかなるものかについて考察している。分析の結果、農業体験活動中、NSとNNSという境界性を感じさせない対等な関係性が構築されていたことが明らかになった。これを可能にしたのは、農業従事者に底流する農業への誇り、非権威的な人間観、他者に対する不断の興味といった人生観が留学生との接触場面に影響を与えていたためであると分析している。

また前掲の嶋原(2016)が言及していた「話題」について「母語話者が話題や知識を与え、非母語話者がもらうという関係性は崩れ、相互に話題や知識を交換し合える互恵的な関係性が構築されていた」と評価し、「お互いが直接に理解し合うことのできない言語が使われたとしても、話題そのものに興味を惹かれ、相互に伝え合おうとする意欲があるならば、母語話者と非母語話者の相違を越えて、話題提供と理解が成立しうる」とも述べている。

従来接触場面研究では、優れたコミュニケーション方略を持つNSとはNNSとの接触経験の量と質が優れている者とされてきた(岡崎・一二三1995, 柳田2010)。だが、市嶋(2014)の活動においてホストをつとめた農業従事者は、外国人や外国文化との特別な接触を持っているわけではなかった。にもかかわらず、なぜNSとNNSの境界を感じさせない相互の伝え合いが可能になったのかという問いに対する筆者の考察は注目に値するものである。

本研究で取り上げた農業従事者である父と母は、外国人との接触経験は少なく、日本語教育学を専門としているわけではないにもかかわらず、留学生達に言葉の境目や気まずさ、ストレスを感じさせることなく、「あったかい感じ」をつくりだすことを実現した。(中略)母語話者と非母語話者という境界性、非母語話者の会話からの排除を感じさせない対等な関係性に基づく環境は、外国人との接触経験が決して多いとは言えない、農業従事者の自然接触場面において実現されていた。(中略)それでは、

何が対等で互恵的な関係性に基づく言語活動空間の形成を可能にしたのか。それは、父と母の中に底流する、農業のプロとしての自信と誇り、非権威的な人間観、他者に対する不断の興味、これら父と母の人生観そのものがコミュニケーションに反映され、留学生達が「いい気持ち」でいられる「あたたかい」言語活動空間の形成を可能にしたと考えられる。この空間は、母語話者、非母語話者という括りを乗り越えた、固有の人生観を持った人間同士の接触場面空間であったと言える。(市嶋2014: 11)

本稿の冒頭でも述べたが、日本における在留外国人ならびに訪日外国人の数は飛躍的に拡大している。このように、日本国内の各地において今後さらに様々な「接触場面」が生まれることを考えると、市嶋(2014)が示している研究成果は、一部の特別な経験をしてきたNSだけがNNSとの接触場面において「円滑なやりとりの実現」(野原2014)が可能なわけではなく、それぞれの立場や経験値の中から「多様性の中の普遍性」(宇佐美2014)を導き出していける存在であるという新たな視座を提示している。

4. まとめ

4.1 総括

前章では66本の「接触場面」の研究論文を整理し、分析・考察を行った。その結果、接触場面を題材にした研究には依然として次のような偏りがあることが確認された。すなわち、①NNSの母語が中国語ないし韓国語に集中している、②相手言語接触場面が専ら取り上げられる、③二者間の会話が多数を占める、④自然会話は限定的であり、多くは実験的な会話場面をデータとする、という点である。

例えば、NNSの母語に特化して対象者を選定し、実施された研究は数多いが、その多くは中国語母語話者に、次いで韓国語母語話者に注目していた。NNSの属性という点ではペルシア語母語話者に注目したアキバリ(2015)などが接触場面研究において先駆的なものと位置付けられる。在留外国人、訪日外国人とも増加傾向にある日本社会の近況を思えば、さらにこの点が強化されてもよいだろう。

また、実際に会話データを取って分析した研究であっても、その大半が二者間での相手言語接触場面によって占められており、その多くは実験場面である。「友達と自由に話してきてほしい。そしてその場면을録音してきて」というタスクを課したものなどは、実際使用の側面を持つとしたが、厳密には自然な会話場面とは言えないかもしれない。他に、チューター活動や授業内での協働学習などを対象にした研究も散見されるようになった。これなどは会話参加を記録することも参加者がそれほど違和感を覚えずに済むものであっ

ただろう。日本人学生と留学生の協働のクラス活動などは、接触場面がもたらす教育効果への関心の高まりとも言える。

以上の分析・考察の結果から、接触場面研究には、さらなる展開の余地が大きく残されていると言える。最近では安藤(2015)のように「やさしい日本語」(庵2016)をキーワードに加えた論考も登場しているが、その殆どは実証的な接触場面の会話分析にまで昇華されたものではなく、さらなる分析・考察が望まれる。多様な接触場面こそが多文化共生社会の一端を体現するものであると考えると、研究対象のバリエーションはさらに検討され、研究成果の社会への還元もさらに推し進められるべきである。

4.2 「市民リテラシー」を意識した接触場面研究への展開

最後に、本研究における文献調査の結果を踏まえ、接触場面研究を改めて社会と関連付けて捉えることで、今後の展望および社会への還元について検討してみたい。かつて徳川(1999)は「ウエルフェア・リングイスティク(福祉言語学, 厚生言語学)」の概念を提唱し、人々の幸せにつながる、社会の役に立つ、社会の福利に資する言語・コミュニケーション研究を目指すべきであるとした。では、冒頭でも述べたように日本社会がまさしく「隠れ移民大国ニッポン」と化している現状において、接触場面研究は社会に向けて何を発信し、その研究成果をいかに社会へ還元していくべきだろうか。

確かに、本稿が対象とした5年に限っても、接触場面研究は未だ過渡期にあり、多くの可能性を秘めていることが明らかになった。今後、その充実を呼び掛ける上で、まず言及しておきたいのは、NSとNNSの二項対立で捉えられる傾向にある接触場面の各構成員のあり方を再考することである。NSが存在しない接触場面、すなわち第三者言語接触場面さえ拡大しつつあるのが現代の日本社会である。たとえ相手言語接触場面であっても、NSは常に言語ホストとして支える側に立ち、一方でNNSは言語ゲストの地位に甘んじるべき存在なのか。

近年活発に議論されている「やさしい日本語」研究を見ても、言語ゲストに対する言語ホストからのインプットにばかり目が向けられるきらいがある。だが、NSからどのような「やさしい」インプットを与えるのかに拘泥するのではなく、むしろNSとNNSの双方による「歩み寄り」に目を向けるべきではないか。例えば市嶋(2014)は、言語ゲストと言語ホストという二項対立の軸からの脱却について、目的意識の共有と多様な価値の尊重によって「NSとNNSの境界を感じさせない相互の伝え合い」が可能であることを具体的に示している。

さらに宇佐美(2014)は、相互理解のための歩み寄りに基づく新たな社会的規範生成の

可能性を論じている。社会参加者各自が自分の評価価値観・評価プロセスが他者のそれとどう違うのか、ということと比較する経験を重ねることで「多様性の中の普遍性」を導き出すことは可能であり、これからの社会において欠かせない視点であると述べている。これは、接触場面における評価の問題を論じた高(2013)の研究にも通ずる。既に多文化共生主義の具現化が強く求められている日本社会の中で、「評価する側」と「評価される側」、そしてその根底にある「規範」の位置付けについて再考すべき局面を迎えていると言える。

日本社会で必要とされる「市民リテラシー」養成の重要性を説いた宮崎(2011)は、「先住者(母語話者)は、従来の社会規範の確立に貢献してきた功労者ではあるものの、多文化・多言語社会へと変容するプロセスの中で、適応能力が求められるのは、一部のエスニック・マイノリティだけではないことを強く意識しなければならない」(p.94)と述べている。換言すれば、まさにNSとNNSの「歩み寄り」による規範の再構築であろう。本稿冒頭で触れたように、隣人としての外国人の存在が日常的になって来た今日、いつまでもNNSをゲストと規定し、そのように処遇し続けていくことは、来るべき多文化共生社会にはそぐわない。NSとNNSが相互に接触場面の規範を乗り越えていく過程こそが市民リテラシーの獲得につながり、これによって真に多文化共生が実現できるであろう。今後の接触場面研究はこのような社会的要請を認識した上でさらに推し進められ、その結果はより積極的に社会へ還元されるべきだと考える。

付記

本稿は2017年9月17日、関西大学で開催された第40回社会言語科学学会大会においてポスター発表として報告した内容をもとに加筆修正を加えたものである。

参考文献

- 栗飯原志宣(2012)「ビジネス接触場面における日本語母語話者の問題意識－使用言語の違いから見る問題意識の共通点と相違点」『早稲田日本語教育学』10, pp. 109-133
- アキバリ, フーリエ(2015)「Taarof(ターロフ)場面における談話管理－ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面と内的場面の比較から」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』292, pp. 15-29
- 安藤郁美(2015)「日本語母語話者は初級日本語学習者に防災知識をどのように説明するか－接触経験の差によるコミュニケーション方略の違いに焦点を当てて」『日本語教育方法研究会誌』22(1), pp. 96-97
- 庵功雄(2016)『やさしい日本語－多文化共生社会へ』岩波書店

- 市嶋典子 (2014) 「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察－農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3, pp. 1-13
- 林炫情 (2016) 「接触場面での日本人韓国語学習者の呼称使用ストラテジーとそれに対する韓国人母語話者の容認性判断」『山口県立大学学術情報』9, pp. 17-29
- 宇佐美洋 (2012) 「自己と向き合うための評価研究－個人の能力を伸ばす教育からコミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ」言語管理研究会第28回定例会資料集
- 宇佐美洋 (2014) 「自己と向き合うための評価研究－個人の能力を伸ばす教育からコミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 87-98
- 浦野萌 (2016) 「中国人日本語学習者との接触場面における日本語母語話者の役割」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』51, pp. 209-248
- 袁帥 (2012) 「日中接触場面における『ほめ』－中国人日本語学習者の『ほめ』の言語行動と言語問題を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』248, pp. 107-122
- 大栗真佐美 (2012) 「中国帰国者のアイデンティティ」『京都産業大学論集(人文社会系列)』45, pp. 415-432
- 大津友美 (2013) 「接触場面の会話において非好意的評価はどう構築されるか－留学生から日本人学生への評価に注目して」『日本語教育方法研究会誌』20 (1), pp. 98-99
- 王冰菁・瞿莎蔚 (2016) 「日中接触場面におけるインターアクション問題と調整ストラテジーに関する一考察－中国人日本語学習者側を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』307, pp. 95-114
- 岡崎敏雄・一二三朋子 (1995) 「多言語・多文化共生のパースペクティブに立つ日本語教育の枠組と日本語教育における言語的共生化」『教育研究紀要』41 (2), pp. 450-455
- 片山智子 (2012) 「日本人学生による学習自習室での日本語会話サポートの試み」『ポリグロシア』22, pp. 185-195
- 勝田順子 (2015) 「マレーシア人留学生と友人日本人大学生の接触場面における「規範」の違い－「あいづち」の「規範」からの逸脱」『社会言語科学』18 (1), pp. 60-74
- 川上郁夫 (2016) 「『公共日本語教育学』構築の意味－実践の学の視点から」『早稲田日本語教育学』20, pp. 33-47
- 許家瑤 (2016) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における話題転換－その(1) 友人関係の下で中国人日本語学習者による話題転換に着目して」『平安女学院大学研究年報』16, pp. 64-73

- 熊井浩子 (1992) 「留学生に見られる談話行動上の問題とその背景」『日本語学』11, pp. 72-80
- 高民定 (2013) 「言語教育における評価研究の課題と展望－接触場面における当事者評価と言語管理観点からの考察」『千葉大学人文社会科学研究』27, pp. 180-191
- 高民定 (2014) 「日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価－語りに見られる言語習慣の通時的管理との関わりから」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 131-144
- 今千春 (2011) 「日本の韓国人居住者の外来性の管理－共時的・通時的分析の試み」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』238, pp. 51-67
- 今千春 (2012) 「韓国人居住者の接触場面向かう言語管理－言語バイオグラフィーからの記述の試み」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』248, pp. 49-67
- 篠崎佳恵 (2012) 「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因－普通体の指標的意味に着目して」『桜美林言語教育論叢』8, pp. 15-28
- 嶋原耕一 (2016) 「接触場面における日本語母語話者と非母語話者の話題に関する意識について－インタビュー調査に基づいて」『言語・地域文化研究』22, pp. 399-412
- 清水昭子 (2012) 「初級新入生の教室外での日本語コミュニケーション状況」『ポリグロシア』22, pp. 149-155
- 鄒曉依 (2013) 「接触場面向かう外来性管理－中国人居住者の移動のライフストーリーに関する事例研究」『千葉大学人文社会科学研究』27, pp. 54-70
- 関崎博紀 (2016) 「接触場面初対面会話における話題スキーマ－日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31, pp. 17-32
- 竹内明弘 (2012) 「初級者が遭遇した問題と言語管理過程を解明してコース改善に反映する試み－インタビューからの示唆を生かして」『Working Papers on Language Acquisition and Education』20, pp. 1-22
- 玉石知佳・武田誠・伊吹香織・岩崎浩与司・杉本美穂・藤本恭子 (2016) 「初級日本語学習者同士の初対面会話活動における意識」『日本語教育方法研究会誌』23 (1), pp. 26-27
- 筒井千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際－非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp. 79-95
- 徳川宗賢 (1999) 「ウエルフェア・リングイスティックスの出発」『社会言語科学』2 (1),

pp. 89-100

- 徳永あかね (2009) 「多文化共生社会で期待される母語話者の日本語運用力－研究の動向と今後の課題について」『神田外語大学紀要』21, pp. 111-129
- 野原ゆかり (2014) 「接触場面における当事者評価－ロールプレイ後の母語話者の振り返りから」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 99-115
- ファン, サウクエン (1998) 「接触場面における言語管理」『国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議用録』, pp. 1-16
- フェアブラザー, リサ・相川弘子 (2014) 「言語管理理論から見た『評価』」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 117-129
- 朴恵美 (2015) 「日本語学習者グループと母語話者参加グループにおけるピア・レスポンス活動の相違－『役割としての支援』という観点から」『一橋日本語教育研究』3, pp. 37-48
- 宮崎里司 (2011) 「市民リテラシーと日本語教育」『早稲田日本語教育学』9, pp. 93-98
- 村岡英裕 (2006) 「接触場面における話順交替時のポーズについて－中国人日本語話者と日本語母語話者の2者間会話に関する研究ノート」『千葉大学人文研究』35, pp. 173-197
- 村岡英裕 (2010) 「接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか－類型論的アプローチについて」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』228, pp. 47-59
- ネウストプニー, J.V. (1987) 「日本人と外国人とのコミュニケーション」『言語シリーズ26 日本語と外国人』, 文化庁, pp. 68-81
- 柳田直美 (2010) 「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響－母語話者への日本語教育支援を目指して」『日本語教育』145, pp. 13-24
- 山本綾 (2014) 「英語話者と日本語話者の接触場面における誤解と不信および交渉」『學苑』888, pp. 13-23
- 楊虹 (2012) 「初対面会話における『同意要求－応答』の連鎖の分析－共感構築の観点から」『鹿児島県立短期大学紀要(人文・社会科学篇)』63, pp. 119-133
- 吉田睦 (2013) 「ビデオカンファレンスにおける海外日本語学習者のコミュニケーション－遠隔接触場面の課題と可能性」『Speech Communication Education』26, pp. 25-44
- 脇坂真彩子 (2012) 「対面式タンデム学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス－日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, pp. 75-

- Gass, S. and Varonis, E. (1991). Miscommunication in nonnative speaker discourse. In N. Coupland, H. Giles, and J.M. Wiemann (Eds.), *Miscommunication and problematic talk*, 121-145. Newbury Park, CA: Sage
- Neustupný, J.V. (1985). Language Norms in Australian: Japanese Contact Situations. *Pacific Linguistics*, 92, 161-170

《巻末資料》2012-2016年の接触場面研究文献一覧 (※ CiNii掲載順に沿って列挙)

2012年	
1	楊虹「初対面会話における「同意要求-応答」の連鎖の分析-共感構築の観点から」『鹿児島県立短期大学紀要』63, pp. 119-133
2	粟飯原志宣「ビジネス接触場面における日本語母語話者の問題意識-使用言語の違いから見る問題意識の共通点と相違点」『早稲田日本語教育学』10・11, pp. 109-133
3	有山優樹・落合知春「〈何ができるか〉という視点に基づく漢字学習-漢字学習ストラテジーの習得を目指して」『JSL漢字学習研究会誌』4, pp. 14-18
4	今田恵美・高井美穂・吉兼奈津子・藤浦五月「基本情報交換以降の話題展開-出会いから始まる会話教材に向けて」『日本語教育方法研究会誌』19, pp. 52-53
5	片山智子「日本人学生による学習自習室での日本語会話サポートの試み」『Polyglossia : the Asia-Pacific's voice in language and language teaching』22, pp. 185-195
6	清水昭子「初級新入生の教室外での日本語コミュニケーション状況」『Polyglossia : the Asia-Pacific's voice in language and language teaching』22, pp. 149-155
7	大栗真佐美「中国帰国者のアイデンティティ」『京都産業大学論集』45, pp. 415-432
8	高映喜「負荷が少ない場面における韓国人日本語非母語話者の謝罪ストラテジー」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 157-173
9	松沼理恵「メディア接触における日本語学習者の言語管理-留意と評価を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 139-156
10	崔英才「問い合わせ談話の全体構造-要件提示部と情報部」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 123-138
11	袁帥「日中接触場面における「ほめ」-中国人日本語学習者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 107-122
12	楊昉「中国語母語話者の不一致応答の言語管理・生成プロセスのモデル-日中接触場面の事例からの一考察」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 89-106
13	鄒曉依「中国人居住者の外来性管理及び言語使用の実態-日本語の動詞使用を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 69-87
14	今千春「韓国人居住者の接触場面に向かう言語管理-言語バイオグラフィーからの記述の試み」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 49-67

15	王冰菁「接触場面における日本語人称表現に関する言語管理」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 31-48
16	大場美和子「話題開始者と受け手間以外の応答の発話の分析－内的場面と接触場面における三者自由会話を対象に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』248, pp. 1-29
17	脇坂真彩子「対面式タンデム学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス－日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, pp. 75-102
18	劉佳珺「会話における割り込みについての分析－日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴」『異文化コミュニケーション研究』24, pp. 1-24
19	篠崎佳恵「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因－普通体の指標的意味に着目して」『桜美林言語教育論叢』8, pp. 15-28
20	高屋敷真人「モジュール型教材による中級後期日本語教科書開発プロジェクト」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22, pp. 119-133
21	竹内明弘「初級者が遭遇した問題と言語管理過程を解明してコース改善に反映する試み－インタビューからの示唆を生かして」『国際大学語学プログラム ワーキングペーパー』20, pp. 1-22
2013年	
1	大場美和子「会話データ分析研究を活用した日本語教員養成課程の授業実践の分析－インタビューからの示唆を生かして」『日本語教育方法研究会誌』20 (2) , pp. 20-21
2	高民定「言語教育における評価研究の課題と展望－接触場面における当事者評価と言語管理観点からの考察」『千葉大学人文社会科学研究所』27, pp. 180-191
3	鄒曉依「接触場面向かう外来性管理－中国人居住者の移動のライフストーリーに関する事例研究」『千葉大学人文社会科学研究所』27, pp. 54-70
4	吉田睦「ビデオカンファレンスにおける海外日本語学習者のコミュニケーション－遠隔接触場面の課題と可能性」『スピーチ・コミュニケーション教育』26, pp. 25-44
5	大津友美「接触場面の会話において非好意的評価はどう構築されるか－留学生から日本人学生への評価に注目して」『日本語教育方法研究会誌』20 (1) , pp. 98-99
6	宮永愛子「日本語学習者の相づち表現の分析－接触場面の雑談データをもとに」『金沢大学留学生センター紀要』16, pp. 31-43
7	高村めぐみ「母語話者規範からの逸脱に対する留意, 評価と調整行動－日本語学習者の音声的特徴を視点に」『日本語教育実践研究』1, pp. 31-41
8	小松奈々「接触場面の意見交換会話における会話参加の様相－発話の長さと言語機能に着目して」『人間文化創成科学論叢』16, pp. 59-67
9	許挺傑「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察－聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態」『筑波応用言語学研究』20, pp. 16-29
10	竹内明弘「学習者の遭遇した問題の音声ファイルを使用した言語管理プロセスの分析」『国際大学語学プログラム ワーキングペーパー』21, pp. 1-19
11	高屋敷真人「モジュール型教材を利用した中級日本語会話練習－教室内と教室外の言語活動の統合に向けて」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』23, pp. 131-146

2014年度	
1	山本綾「英語話者と日本語話者の接触場面における誤解と不信および交渉」『學苑』888, pp. 13-23
2	嶋原耕一「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』16(2), pp. 66-74
3	市嶋典子「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察－農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3, pp. 1-13
4	高民定「日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価－語りに見られる言語習慣の通時的管理との関わりから」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 131-144
5	フェアブラザー, リサ「言語管理理論から見た「評価」」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 117-129
6	野原ゆかり「接触場面における当事者評価－ロールプレイ後の母語話者の振り返りから」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 99-115
7	宇佐美洋「自己と向き合うための評価研究－個人の能力を伸ばす教育からコミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 87-98
8	ラッタナブリー, ナンティヤー「ドラマで見られた申し出表現の使用について－「てあげる」表現を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 81-86
9	孫美那「同意が表れる場面の要件に関する一考察－韓国人内的場面のデータを中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 73-79
10	庄山建一「会話における日本語学習者の文末表現－文末表現の種類別出現率と習熟度との関連」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 57-72
11	阿部響子「留学生の日本語による依頼メールの文章産出過程－文章産出過程に影響を与える要素の分析」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 41-56
12	ミラー成三「インタビュー場面におけるアイデンティティ構築－日本に住む外国人の人称詞の分析」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 21-40
13	鄒曉依「接触場面における動詞語彙の使用及び管理のバリエーション－中国人居住者の事例から」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』278, pp. 1-19
14	呉映璇「接触場面における台湾人上級日本語学習者と日本語母語話者による意見表明」『人間文化創成科学論叢』17, pp. 23-31
15	磯野英治・上仲淳「日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴」『大阪大学国際教育交流センター研究論集』18, pp. 31-39
16	田所希佳子「〈会話者意識〉を用いた意識化促進のためのコミュニケーション教育－スピーチレベルに関する授業実践を例に」『早稲田日本語教育実践研究』2, pp. 65-79
2015年度	
1	安藤郁美「日本語母語話者は初級日本語学習者に防災知識をどのように説明するか－接触経験の差によるコミュニケーション方略の違いに焦点を当てて」『日本語教育方法研究会誌』22(1), pp. 96-97

2	許挺傑「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖」『筑波応用言語学研究』22, pp. 24-37
3	小松奈々「意見交換会話における日本語中級非母語話者と母語話者の会話参加－超上級接触場面との比較から」『言語文化と日本語教育』48・49, pp. 1-10
4	宋佳音「接触場面における会話の調整行動」『言文』62, pp. 27-38
5	朴惠美「日本語学習者グループと母語話者参加グループにおけるピア・レスポンス活動の相違」『一橋日本語教育研究』3, pp. 37-48
6	楊虹「日中接触場面の中国語会話における〈聞き返し〉」『鹿児島県立短期大学紀要』66, pp. 1-18
7	勝田順子「マレーシア人留学生と友人日本人大学生の接触場面における「規範」の違い－「あいづち」の「規範」からの逸脱」『社会言語科学』18(1), pp. 60-74
8	アキバリ, フーリエ「Taarof (ターロフ) 場面における談話管理－ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面と内的場面の比較から」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』292, pp. 15-29
9	喬曉筠「台湾人日本語学習者のビジネス会話に見られる特徴－日本語母語話者の評価から」『一橋大学国際教育センター紀要』6, pp. 65-78
10	嶋原耕一「接触場面における日本語非母語話者の意識的配慮と言語運用について」『言語・地域文化研究』21, pp. 375-387
2016年度	
1	浦野萌「中国人日本語学習者との接触場面における日本語母語話者の役割」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』51, pp. 209-248
2	王冰菁「日中接触場面におけるインターアクション問題と調整ストラテジーに関する一考察－中国人日本語学習者側を中心に」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』307, pp. 95-114
3	関崎博紀「接触場面初対面会話における話題スキーマー日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31), pp. 17-32
4	許家瑤「中国人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における話題転換－その(1) 友人関係の下で中国人日本語学習者による話題転換に着目して」『平安女学院大学研究年報』16, pp. 64-73
5	林炫情「接触場面での日本人韓国語学習者の呼称使用ストラテジーとそれに対する韓国人母語話者の容認性判断」『山口県立大学学術情報』9, pp. 17-29
6	崔英才「接触場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の機能分析－発話連鎖の視点から」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』307, pp. 19-36
7	玉石知佳・武田誠・伊吹香織・岩崎浩与司・杉本美穂・藤本恭子「初級日本語学習者同士の初対面会話活動における意識」『日本語教育方法研究会誌』23(1), pp. 26-27
8	嶋原耕一「接触場面における日本語母語話者と非母語話者の話題に関する意識について－インタビュー調査に基づいて」『言語・地域文化研究』22, pp. 399-412